

ウィリアム・モリスの棲家  
―「赤い家」と「ケルムスコット領主館」

蛭川久康

◆はじめに

ウィリアム・モリスのいかにもモリスらしい発言から始めたい。モリスの断章「中世採飾写本に関する若干の考察」の冒頭部分である。

「芸術」の最重要にしてかつ最も望まれるべき創作は何かと問われれば、私は「美しい家」と答えるだろう。そして、つぎに重要なかつ望ましい創作を挙げよと問われれば、「美しい書物」と答えるだろう。自らを貶めることなく、充足感のうちに良き家と良き書物を享受することこそが、すべての人間社会がいま追求しなければならぬ喜ばしい目標であるように思えるのである。

ウイリアム・モリスの「棲家」といえば、誰しも「赤い家」を真っ先に思い浮かべるのではないだろうか。それに続くのが「ケルムスコット領主館」ではなからうか。過ごした時間に長短はあるけれど、それぞれがこの美術工芸家が生涯を賭けて愛した住まいであり、創造の場であった。その意味で、両者はモリスの人生の里程碑というにふさわしい。

ロンドン北東部、モリス出生の地、エッピングの森に隣接したウォルサムストウ村の「楡の家」も「ウォーター・ハウス」も、あるいは最晩年住みついたロンドン南西部テムズ河畔のハマスミスの「ケルムスコット・ハウス」も、やはり上述二か所の棲家同様に、人間モリスの形成あるいは円熟に資するところすこぶる大であった。ただパブリック・スクールとオックスフォード大学の学生時代、ロンドンを離れて、ウィルトシャーのモールバラとオックスフォードに生活したことがあったが、それは短期間であり、むしろ例外的であった。後半生、染色・織物工房として稼働させたマートン・アベイにしてもロンドンの南西郊外だった。モリスは終始、ロンドン市内（レッド・ライオン・スクエア、クウィーン・スクエア、ターナム・グリーンなど）あるいは近郊から離れることはなかった。ウイリアム・モリスは終身ロンドンの「ジータス・コウサイ地 霊」の篤い守護の下にあった。

そのことはモリスの生涯とテムズ川の深い結びつきに繋がる。モリスは基本的にはロンドンから離れて生活したことがなかった、と言えると同じ意味で、彼は基本的にこの川から離れたことはなかった。いかにこの川に愛着を懐いていたか、そのことは一八七〇年代後半、壁紙・チンツに認められる顕著な特徴である、垂直反転構造と称されるデザインに反映された。学生時代から北フランスへ旅したり、後半生にはアイスランドへ思い入れを深くして、この北国を繰り返し訪れたりもしたが、装飾芸術家モリスの生活と仕事場がテムズの川岸から離れたことは一度もなかった。

本稿は、決して少なくないモリスゆかりの地から、ロンドン東南郊外、ベックスリ・ヒースの「赤い家」とテムズ上流の「ケルムスコット領主館」を取り上げる。盟友、建築家のP. ウェップと最初の協働の成果としての「赤い家」の斬新さ、モリスとその仲間たちの活気あふれる創造の喜び、後のアーツ・アンド・クラフツ運動の素朴な胎動などが看取できるだろう。一方、「ケルムスコット領主館」は「赤い家」の斬新さに欠けはしたが、コッツウォールド地方のテムズ源流に近い牧歌的別天地として「赤い家」を凌駕する理想郷として独自の魅力を具えていた。

ロセッティもその魅力に抗しきれず、共同賃借を希望した。仕事の都合上、ロンドンに居て、モリスは領主館を留守にすることが多かったにもかかわらず、ロセッティの希望を聞き入れた。おそらく一通りでない不安があったと思われる。当時、ロセッティは画家としての存在をジェイン一人に賭けていた感がある。領主館がこの二人の芸術家の理想郷として成立する道理はなかった。モリス不在の領主館、たとえ娘二人が一緒だったといってもジェインとロセッティの共同生活、この不自然な関係が長続きするはずがなかった。早晩、どちらかが身を引くより仕方がなかったらう。

九月上旬、二か月の旅を終えて、モリスがアイスランドから帰国しても、ロセッティは領主館に滞在し続けた。それをモリスは「居座っている」と受け取った。ロセッティにも同じ滞在の権利があったはずなのだが。結局、借地権を放棄した（一八七四）のはロセッティだった。しかし、一度傷ついた理想郷は最早原状回復は望むべくもなかっただろう。それかあらぬか、モリス一家は一八七八年一〇月、長いとはいえない七年間で領主館に見切りをつけて、ロンドン西郊ハマスミスに転居した。断腸の思いだったらう。モリスは転居先を愛惜の情をこめてケルムスコット・ハウスと名付け、終の棲家とした。

「赤い家」から「ケルムスコット領主館」へ、さらに「ケルムスコット・ハウス」に至る一〇数年の歲月、それはいかにもウイリアム・モリスならではの充足の時間でありながら、同時に波乱と鬱屈の痛々しいまでのモリスの時間でもあった。順調な滑り出しを見せながら、モリス・マーシャル・フォークナー商會を襲った改組という難題、妻ジェインの画家ロセッティとの親密な関係（一八七五年まで続いた）。この不条理に際會して、モリスはとう身を処したか。傍目にも苛立たしいまでに無策だった。初めて手掛けた渾身の作、彩飾手稿本『詩の本』をバーン・ジョーンズ夫人の誕生日に贈るモリス。そればかりか、もう一人のコンフィダントであるアグレイア・コロニーオに寂寥を吐露しづけたモリス―それしもモリス流儀の対処であったのか、どうか。

本稿は、そんな錯雜するウイリアム・モリスを次のふたつの表題のもとに跡づけるものである。（数字はページを示す）

「赤い家」……家というより一篇の詩だ……4

「ケルムスコット領主館」……太古の安らぎを秘めた最高の隠れ家……22

◆「赤い家」――家というより一篇の詩だ――

「赤い家」はロンドン東郊外ベックスリーヒースに残る、美術工芸家ウイリアム・モリスが手掛けたいかにもモリスの流儀にあふれた魅力的な住まいである。ウイリアム・モリスはここに一八五九年から六五年まで住んだ。短い期間だったが、ジェイン・バーデンとの新生活、すばらしい仲間との多くの出会い、青年期の夢を託した商會の設立など、モリスの生涯をさまざまに予示する舞台となった。

住まいの新築をモリスに思い立たせたのは、ごく平凡に結婚を控えての新居の算段だったろう。「平凡な算段」だったが、「非凡な結果」を招来した。ウィリアム青年は二五歳、一八五九年四月二六日、オックスフォードのセント・マイケル教会でジェイン・バーデンと結婚式を挙げた。ラファエル前派を代表する、自他ともに認める「スタンナー」、ジェイン・バーデンをロセッティとともに発見したのは二年前、オックスフォードの劇場であった。

新婚の二人は六週間の大陸旅行に出る。モリスお気に入りのパリ、ベルギー、ラインラントへの旅であった。帰国後、「赤い家」の完成する一八六〇年六月まで、フィリップ・ウェップの建築事務所のあるロンドン、グレート・オーモンド・ストリートの家具付きの借家に仮住まいした。

モリスは、新婚旅行から帰ると、新居のための土地探しを精力的に行う。新居は中世趣向に適い、自然豊かな場所でなければならなかった。そればかりか、室内装飾についても、ウェップの協力を得ながら自在に用意しなければならなかった。マッケイルの言をまつまでもなく、「それはモリスであることを証する住まいでなければならなかった」モリスは前年の夏、フォークナー、ウェップと北フランスを再訪の途中、新居の相談をすでにウェップに持ちかけていた。相談はすぐに正式な依頼にまで進展したと思われる。何故なら、ウェップはストリートの建築事務所を辞め、自分の事務所を構え独立したからである。モリスは「赤い家」の建築を住宅と装飾芸術との融合の試金石と捉えただろう。おそらく、この時初めて総合芸術家としての建築家であることを強烈に意識しただろう。たとえこの時のモリスが画家への転身を公言していたとしてもである。建築家モリスはたった一軒の家しか建てなかつたけれど、その一軒が「赤い家」であり、生涯モリスは「建築家」であることをやめなかつた。

「赤い家」の建築にモリスは野心的に立ち向かう。既存のデザイナーに家具調度を発注するつもりは毛頭なかつた。一八五六年の夏の終わり頃、バーン・ジョーンズとともに借りたロンドンのレッド・ライオン・スクエア一七

番の部屋のために創意をこめた椅子、テーブルなどの家具その他を自前で準備した達成感がまだ生々しかった。その時の欲びを他人に手渡ししてしまうことなど論外だった。

実見、そして選ばれたのが、穏やかな表情の牧草地と果樹園（とくに林檎の木）に恵まれたケント州アプトン村のベックスリーヒースだった。そこはロンドンから南東へ一〇マイル、最寄りの駅アビ・ウッドから三マイルの田園だった。今でこそロンドン南東部に接続する住宅地であるが、当時はまだ英国の典型的な田園風景が台地状に広がる田舎だった。旧ローマ街道ウォトリング・ストリートがその台地を縦断してドーヴァーに通じていた。モリスにはチョーサーのcantabery巡礼路が走る土地柄であることも魅力だったはずである。

結婚の翌年一八六〇年六月、ベックスリーヒースに林檎と桜桃に囲まれた「赤い家」が完成する。クレイ川とダレンス川の低地が見晴らせる開けた風景と果樹園がモリスの想像力を捉えた。ウェツプの設計は、図1（九頁）でわかるように、二階建L字型の赤煉瓦作りだった。北側翼部と西側翼部がL字を形作り、両者が出会う出隅部分の内側角に階段が設けられて、ここを両翼部の結節点として東と南の二方向に廊下がのびる造作である。

敷地の北側に沿うレッド・ハウス・レインから、鉄製の蝶番が裝飾的なオーク材の白く塗られた門を入ると、ゆったりとした感じの玄関の前に立つ。玄関ホールに入ると、階段が目の前で、左が応接間と来客用寝室に、右が食堂に通じる。廊下は南側と東側に設けられているから、応接間も食堂も通常予想される明るい日差しのある配置に合致しない。厨房とそれに付属する食料・食器貯蔵室などが西側翼部を構成する。

二階も一階の間取りの上に乗った格好だから、食堂の上の客間もやはり北西隅にある。二階の両翼部を占めるのは、客間のほかに書斎、主寝室、子供部屋など数室だが、いずれも階下と同様、南東からの明るい日差しは期待できない。F・マッカーシも「間取りは当時としては風変わりだった。主居間、アトリエ、客間それに寝室を加

えた部屋が二階に、広い玄関ホール、食堂、書斎、モーニング・ルーム、それに厨房が一階にあった。厨房は例外的にゆつたりした場所で、前庭に面した窓付きの明るい感じのよい部屋だった<sup>(2)</sup>と解説する。使用人には家中でいちばん日当たりのよい、二階の南側部分をあてがった。そして「モリスとウェップは、さすが社会主義者の卵だけあって、使用人には優しい例外的な条件を準備した」と言うが、確かに家中で一番日当たりが良い部分だった。

こうした型破りな間取りは、設計者の無能がもたらしたとは考えられないが、ただ設計者の未熟とする考えがなわけではない。まさか建築依頼主モリスが設計者ウェップをいくら信頼していたからといって、設計を丸投げしたとは考えられない。いずれの資料も異口同音に二人が稀にみる共同作業を展開したことを指摘するからである。仮にウェップの独走・独断の結果だったとしたら、モリスはその性分から激怒し、絶交さえ意に介さなかっただろう。逆に二人の友情は一八六一年四月のモリス・マーシャル・フォークナー商会の設立、その後の商会の活動を通じて一層深まりはすれ、損なわれることはついになかった。

では、合点のいかない間取りは（日本では「南側の日当たり」にこだわり過ぎるのかもしれない。そう、イギリス人がこだわるのはなによりも暖炉である）、どうして現実のものとなったのか。指摘があるように、いくら暑さを苦手にしたモリスだったとはいえ、寒くて薄暗い部屋を所望したとは考えられない。「敷地として制約があった訳ではないのだから、こうした間取りはウェップの経験不足のせいにしていいかもしれない。あるいは昔から南向きは健康によくないという信仰があったから、モリスが必要以上に北向きにこだわったのかもしれない<sup>(3)</sup>」という考えは一理あるだろうが、それとてもやはり説得力に欠けると言わざるをえない。

この使い勝手の悪さについて、W.ゴントは一つの卓見ともいえるべき評言を記した。モリスはいわば「夢食い人」であったから、例えば、商会を設立して日常品を作ることにあれほど腐心しながら、夢を紡いで拵えられた商

品は、「いったん出来上がってしまえば、それが実用的かどうかはもうどうでもよかった」、「大切なのは製品より夢であり、物質に対する想像力の勝利が手放せなかった」。「僕だけの芸術の小殿堂」であった『赤い家』はそうしたことの最初の実例であった。「神憑りの居心地の悪さ」、「神々しいまでの居心地の悪さ」が滞在客の口から洩れた「贅辞」だった。一八五九年の雨の少ない暑い夏の普請だったので、冬場の対策などモリスにもウェツプにもまるで念頭になかった、という。

『赤い家』の設計は「剥き出しの台地にむかって北向きに建てられた。そればかりか、窓からは中世の光が、それもわずかばかりの光が差し込むだけだった。寒く、暗く、日常生活には不便な建物であったが、こんな欠陥住宅もモリスにはこれっぽっちも苦にならなかった。『赤い家』はあらゆる点で完璧だった」ことによると、ジェインは不平・不満を言ったかもしれない。それでも「完璧だった」のは絵付き家具などを日光から守ることができ設計が実現した満足感があったからに相違ない。そればかりか、庭の植木のための日当りにも配慮した挙句の間取りだったとも考えられるのである。

「赤い家」の外観について。

このよく知られた住居について、わが国でも一九一一年（明治四四年）英国留学から帰国した陶芸家、富本憲吉によって、一九一二年『美術新報』誌上に「ウィリアム・モリスの話」と題して次のように紹介された。「赤い家」に関するわが国初の文献である。

赤煉瓦を美術的な見地から住宅建築に応用した最初の例として最も貴重なものと考へます。絵の様な複雑な



形の組合せをやった此の建物のエレベエションが当時一般に使はれて居りました拙悪な四角いマッチ箱の様なものに比べて、非常に立派な別段な面白みがあるものと言わねばなりません。誰れもコウ言ふ事を心付かぬ時代に、只美しい良いものを造ると言ふだけの目的だけを見あてに今迄の悪い習慣を打ち破ってやった勇氣と、自分を信用して居た点だけでも実に感服の外ありません。

作り手に信頼を寄せる文章である。富本が指摘した「四角いマッチ箱の様な」、実利主義の時代に多数設計された功利的箱型の建物を、モリス本人も檜玉に上げ、「なんとも胸糞悪い醜悪な古典的建築の模倣である街いの多い建物」と非難した。富本は続ける。「大きい重い瓦の屋根、赤煉瓦の厚う見える壁、四角い窓、低い大きい出入口、大きい重い戸、等を使った家が、古い果樹や種々な草花をうまく取り合はした庭に囲まれてドツシリと建って居る。先づ見た処一幅の良い絵の前に立った時と同じ様に整った、バランスの取れた感じをあたえる」

赤煉瓦によるシンメトリを排した造形的な面白味のある特徴的な急傾斜の屋根はだれもが指摘する外観の魅力である。茶褐色のスレート葺き屋根、階段を暗示する縦長の窓、屋根に突き出た高い風見、そこにW・Mの頭文字とモリス家の紋章の馬首が唯一の装飾として取り付けられた。簡素な赤煉瓦の使用、堅固・明快な構造、「赤い家」はこれみよがしな装飾とはまったく無縁である。

A. ヴァランスは、一八六三年に「赤い家」を訪れて、「驚きと喜び」の手記を残した。「濃い赤い色、急傾斜の瓦タイルの屋根、小ガラス張りの窓、幅広の低い玄関、どっしりした扉、スイートブライアと野ばらの生垣に囲まれた庭はいくつもの区画に仕切られて、それぞれにさまざまな花が植えられていた。……なにかもが生き生きとして絵のように美しく際立って独創的だった」<sup>(7)</sup>「絵のように美しく、不規則な構成をもつ赤い家は、当時国中どこ

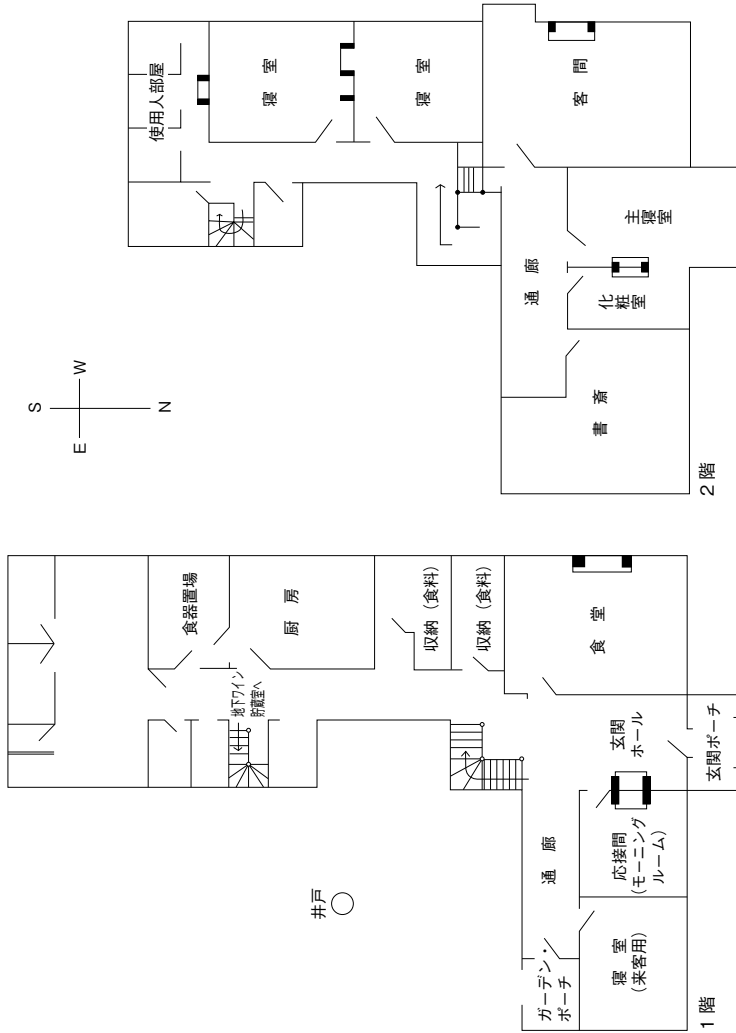


図1 「赤い家」平面図

にも見られたと思われる醜悪な四角い箱型の建物にまじって、際立つ存在だった。その頃としては大胆な革新だった。……世のしきたりという暴君に抵抗することを可能にする不屈の意志と夢の両者を兼ね備えていた一人の人間の実験として、『赤い家』が住宅建築に新時代を開いた名譽はウィリアム・モリスのものである」と賛辞を呈した。<sup>(8)</sup>

一方、「赤い家」の獨創性を否定するわけではないが、J. リンジは、ピュージンによるパーミンガム主教邸を一例としながら、先行した事例は多数存在するわけではないが、J. リンジは、ピュージンによるパーミンガム主教邸を一手掛けた都会および田舎の牧師館はピュージンの世俗建築の引き写しであり、「赤い家」は、その赤煉瓦といい煉瓦のアーチ通廊といい階段部分の明かり窓といい、多くが上記建築家たちを下敷きにしたと見做すことができると指摘した。<sup>(9)</sup> その上で、「赤い家」の全体を独自の魅力あるマッスにまともな上げた功績はあくまで設計者ウェップの手柄であると評価を惜しまなかった。そして、完成当初は格別注目されなかったが、美術工芸家としてのモリスの名が高まるにつれて、ようやく近代建築におけるモリスの役割が認識されるにいたったとも言う。公平・自在な所見である。たぶん、J. リンジの言いたかったことは、外観もさることながら、「赤い家」は全体として意外と均衡のとれた、落ち着いた雰囲気建物である、ということではなかったか。

また、F. マッカーシも同じように、ストリートやバターフィールドによる学校や牧師館の先例（赤煉瓦の使用も含めて）を指摘しながら、「赤い家」は前者の影響を受けた教会建築といってもいいくらいだと述べながら、すぐ続けて「だが、ウェップはおそらくヴィクトリア朝のどの建築家よりも建築に憑かれた、獨創的な建築家であつただろう。そして、今回の依頼に際して、多年の地道な研鑽の成果と英国中世に寄せるその並々ならぬ情熱を注ぎ込んだのだ」と付け加えて、リンジーと相通じる所見を記した。多数の先行例があつたとしても、それがウェップ

の業績を必ずしも貶めるものではなく、先人の達成の上に「赤い家」の成功があったとしても、むしろ喜ばしいことではなかったか。

中世僧院風の「赤い家」はどっしりした頼りがいのある、訪ねる者に一度住んで見たいと思わせる、そんな親しみを感じさせる住まいである。印象として強く心に刻まれるのは、モリスの構想が達成した調和ある心地よい住まいの雰囲気である。滋味ある統一感こそがこの建築物のなによりの美点である。ジョージアーナは、たぶんそのことをふくめて、「大きな屋敷ではなかったが、建物の目的と広さが設計上巧みに勘案され、それ相当な要求のすべてに適い、家中たっぷりした余裕があるという印象の住まいである」と好感を寄せた。<sup>(11)</sup>（現在はナショナル・トラストが管理、一般公開されている）。<sup>(12)</sup>

次に「赤い家」の室内装飾について。

外観と同様野心的である。モリスの壁紙は一八六四年が最初だったから、装飾には絵画および壁掛けを多用した。壁とドアと天井はいうまでもなく、収納戸棚などの家具までも室内装飾の対象とし、しばしば中世物語に題材を求めた。なかでも二階の客間は「イギリスでもっとも美しい部屋」<sup>(13)</sup>に仕上げる計画を立てた。新婚の二人のために、ロセッティやバーン・ジョーンズ、ウェップはいうまでもなく、ジェインの妹エリザベス・バーデンやリジーをふくめた多くの仲間がそれぞれ好みの題材による絵付き調度を祝品として贈った。モリス本人によるすばらしい出来栄の板絵をもつ収納戸棚もある。それらの保全、ことに板絵の保全を考えると、直射日光は避けなければならなかった。身近なところにあつて日常を美化する意図に合う板絵こそ優先して保護し、そのための多少の犠牲は厭わなかった。日光が強敵であるのは、オックスフォードでの壁画制作（一八五七年、ロセッティ主導で行なわれ

た大学学生会館討議場の共同壁画制作)でいやと言うほど知らされていたからである。モリスは住み心地より美を優先させたのだ。

二階の客間はモリスの個性的な空間として評価が高い。客間へ通じる廊下は南に面して明るい。ステンドグラスの丸窓と装飾模様が描かれた天井をもつ廊下が「世界一美しい」客間に通じる。屋根の急勾配と構造が剥き出しの客間は、天井が高く、納屋を連想させる造りで広くゆったりとした空間である。モリスがケルムスコットに近いグレート・コックスウェルの巨大な納屋を「大聖堂のように美しい」と絶賛したことを思い出す。

異彩を放つのは、ウェッジ設計の大型の暖炉とともに、レッド・ライオン・スクエアからわざわざ運んで来た、モリスとウェッジの共同製作による独創的な家具だった。通常セトルと呼ばれる戸棚を兼ね備えた大型の長椅子(幅約二メートル半)である。普通、セトルは椅子の下部が物入れになっているのが特徴だが、現在、そこには暖房機が嵌め込まれているなど、かなり手が加えられている。三つに仕切られた戸棚の扉には、ロセッティによってダンテとベアトリーチェを題材にした三点の油彩が描かれたが、いずれも三年後の一八六三年夏までには取り外されてしまった。内一点《ダンテの愛》(一八六〇)は現在テート・ブリテンが所蔵する。

この大型長椅子の独創の真骨頂は、上部に手摺りを加え、左側面に取りつけられた梯子で上れるように工夫された一種の棧敷席を特設したことである。クリスマスなどに聖歌を仲間と歌うことを考えていたらしい。ジョージアーナはこの棧敷席を「吟遊楽人の席」と呼んだ<sup>14)</sup>。こうした一連の発想は、言うまでもなく、中世の封建領主の館に特徴的だった大広間の造りに倣ったものと考えられる。

一般に領主館は大広間中心の間取りで、広間の一端に出入口が、それと相対して床面より二、三段高いデイスと呼ばれる舞台が設けられるのが定石である。この舞台は一家の主人およびそれに次ぐ上位の者や客人などの食事・

宴会の際の上席であり、そこにおかれる頑固な食卓はハイテーブルと称された。読者の中には、創設が中世に遡るオックスフォード大学の学寮のいまなお続く食事風景を想起する方も多いだろう。ハイテーブルに席をとる貴人・賓客に対面して、通常、出入り口の上部に楽師などのために棧敷席が、さながらオーケストラ・ボックスのように設けられた。「赤い家」の客間はこうした中世の構造を遊び心も豊かに反映した造作だった。

客間は、七点のテンペラ画によって壁面を帯状にぐるりと囲む構想だったが、結局、仕上がったのはバーンII ジョーンズが一八六〇年夏「赤い家」に滞在中に描いた三点だけ、英国中世のロマンスの主人公サー・デグラヴォーントを主題にした《結婚》、《結婚の行列》、《婚礼の祝宴》だけだった。《婚礼の祝宴》に描かれた騎士と花嫁はモリスとジェインがモデルである。

玄関ホールに備えられた大型彩色キヤビネットに設けられた幅広の二枚の扉には一枚絵としてモリスが手掛けたが、未完のまま終わった。「物語は語られていないが、人物から人物へとリズムが続き、『赤い家』の理想である喜びにあふれる庭園を表現した扉絵である。……この地上の楽園である囲まれた庭で、九人の男女が楽を奏し、歌い、踊る。庭の向こうの家々は樹に覆われている。このテーマはマローリーから示唆を受けている」とウイリアム・モリス協会会長だったレイモンド・ワトキンソンは解説する。

バーンII ジョーンズはチョーサーの『カンタベリ物語』の「女修道院長の物語」に拠る一場面を描いた絵付け衣裳箆笥をジェインに贈った。ジェインを処女マリアとして描いたこの家具は彼女の寝室に置かれた。リジーはジェインのために木製の宝石箱に宮廷場面を描いて結婚の祝品とした。ジェインの妹エリザベス・バーデンは姉のために、モリスがチョーサーの『善女列伝』に拠ってデザインした客間用の刺繍パネルの完成に協力して実績を残した。ウェッブは設計者として建物全体をはじめ家具調度、ステンドグラスなど実に広範にして確実な仕事を成し遂



図2 「赤い家」井戸屋がある中庭と南東側面 — 諸特徴が文字通り一目瞭然。



図3 「赤い家」西側面 — 暖炉の煙突の存在感。こんなところにも寄贈者の名を刻んだ小さなベンチが、いかにも英国らしい。

げた。一階の廊下のための、小動物や小鳥を図柄にしたステンドグラスと銅製の燭台一對を、そして子供部屋用に黄色を基調とした向日葵と鳥のステンドグラスをデザインした。数点のテーブル・グラスのデザインも手掛けた。マッケイルの言うとおり、「椅子、テーブル、あるいは寝台、壁に掛ける布あるいは紙、暖炉や廊下の縁取りタイル、カーテン、燭台、葡萄酒を容れる広口の容器、葡萄酒用のグラスなど、どれひとつをとっても、当代流行の品々の無味乾燥な醜悪さから逃れようとするれば、改めて一から作り直さないうで済むものはなにひとつなかった」<sup>16</sup>のである。

次は庭について。

「広くても狭くても、庭は秩序があつて豊かでなければならぬ。外の世界からしつかり隔てられていなくてはならない。自然の気まぐれをあるいは荒々しさを模倣してはならないが、家の近くにあるなら別だが、眺める対象とすべきではない。もつと言えば、家の一部であると思えるようであればならない。そう考えると、個人的な喜びの庭はそう大きくあつてはならない」とは一八七九年モリスが行った講演「最善を尽くすこと」における発言であるが、モリスは庭を生活から切り離せない親しい空間としてイメージを喚起する場所でなければならぬと考えていた。刈り込まれた古いイチイの生垣が仕切る庭は街いがなく心地よく、家の一部であるように思えること、せめて家の衣服であると思えることが肝要と信じていた。

庭は「部屋」の延長・連続に等しく、生垣や編垣や樹木がプライバシーを守る壁の役割を果たし、真つすぐな小道や縁取りの花壇が調度となり、溢れかえる花々が室内装飾の役を果たすという。庭を住まいに近づけるとこの発想はモリスの次の住まい、ケルムスコット領主館にも確実に受け継がれた。



こうした住いと庭の統合関係を、F. マッカーシは『赤い家』の庭は文字どおり建物の中に流れ込んでいる<sup>(17)</sup>と表現して、モリスにおける庭と建物との一体感を指摘した。この思想がイギリスの庭園設計に新しい動きをもたらしたとも言う。具体的に、例えば、因襲打破のウィリアム・ロビンソン著『イギリスの花の庭』（一八八三）や独創的な造園師 J. D. セディング著『造園、今と昔』（一八九一）などを名指ししながら、「ひよつとしたらモリスの庭は家より大きな影響力を持ったのではなからうか」と述べた。また、もしモリスがいなければ、ガートルード・ジェキルは存在しなかつただろうとも述べた。『薔薇とイギリスの庭』（一九〇二）の著者であるジェキルはサリー州生まれ、モリスより九歳年下で、ラスキンの思想を逞しく造形化するモリスに傾倒したモリスの信奉者のひとりだった。彼女は造園、デザイン、刺繍、織物などを手掛けたが、自然に対する感性と畏敬はモリスに共通する。一八六九年クイーン・スクエアでウィリアム・モリスに実際に会っている。

F. マッカーシに「流れ込んでいる」と言わせたのは、おそらく北翼部の東端に設けられた中庭への出入口部分であろう。そこにはどっしりした赤塗りのテーブルと壁に沿って腰掛けが用意され、中世僧院の井戸のある中庭と薔薇がからんだ格子垣を眺めることができた。それは、たんなる出入口ではなく、立派な「ガーデン・ルーム」といってよい独自の空間だった。天気さえよければ、イギリス人が大好きな日光浴を楽しむことができただろう。

中庭は北側と西側が建物によって囲まれ、南と東に向かって開いている。植物には理想的な庭である。「多くの花を咲かせる蔓植物が建物の壁面に絡んで、早くから植え込まれていたせいだろう、植えたばかりという生硬な感じはなかった<sup>(18)</sup>」と細やかな視線を注いだのはジョージアーナ。

「赤い家」のシンボル・マークが、中庭にしつらえられた中世の僧院を意識した井戸屋である。むろん、ウェツプの設計で、L字型平面図上の焦点として入念に計算された位置に設けられた。それは茶褐色の円錐形の屋根をも

つ。これを「巨きな蠟燭消し」<sup>(19)</sup>に譬えたのはF. マッカーシである。「女魔法使いの帽子みたいだ」と言ったのはE. メイネルだった。建物と一体をなす形で、中庭は薔薇の格子垣によって外界から隔てられ、中世の僧院の空気が濃い。マッケイルは「夏至の頃には百合、秋には向日葵、色々な花が咲き乱れる庭は、薔薇が絡んだ格子垣がめぐらされて、庭は建物とともに当時としては、きわめて斬新な作りだった。建物は果樹園の木をほとんど一本も切らずにすむように設計され、暑い秋の夜に窓を開けておくと、林檎が家の中に落ちて来た」と、自然に優しいモリスの庭の勘所を見事に捕らえた。やがて、庭を飾ったたくさんの花々は庭木とともに壁紙デザイン発想の重要な手掛かりとなる。

モリス自身は、シヨイ宛て書簡（一八八三年九月五日付）で「中世精神の旺盛した家」と言及した。ロセッティはチャールズ・エリオット・ノートンへの手紙（一八六二年一月九日付）で「金持ちのモリスがケントに建てた自邸をぜひ君に見てほしいな。あらゆる点でこの上なく高貴な作品、家というより一篇の詩だ。どう知恵を絞っても思いつかない程の建物で、住むとしても惚れ惚れする家だ」と絶賛した。また別に友人のウィリアム・アリンガムには「君、現代の紛れもない奇跡を見ておかないとね、そのトプシの家をさ。どう説明したっておっつかないのだ」とも書いた。そのアリンガムは「赤い家」を訪問して（一八六四年七月）、日記にこんなふう綴った、「ロンドン・ブリッジ駅まで蒸気船で、あと汽車でプランステッドへ。少し道に迷ったが、やっと薔薇の植え込みの中に『赤い家』を見つける。ウィリアム・モリスと独特な黒髪の女王様のような奥方の姿があった。また七月一日には、「月曜日、午前七時半『赤い家』で。薔薇の格子垣。目をきらきらさせた巻き毛のおつむのジェニーとメイ……仏頂面の呑気屋の大柄の靴姿のW. M.」とも。

「赤い家」はすぐにロセッテイ、バーン・ジョーンズら仲間の社交の場となった。「赤い家」の完成一カ月前の一八六〇年五月、ロセッテイは、六年越しの交際の後、南英ヘイステイングズでようやくエリザベス・シダルと結婚を挙げた。シダルは恋人の神経質な、時には不条理とも思える長い婚約関係がもとで著しく精神を病んでいた。シダルの死は結婚から二年も経たない六二年二月だった。ロセッテイの結婚の翌月、バーン・ジョーンズがマンチェスターでジョージアーナと結婚式を挙げた。二組の新婚夫婦をはじめ、フォード・マドックス・ブラウン、コーメル・プライス、フィリップ・ウエップ、チャールズ・フォークナー、ウィリアム・アリンガムなど入れ替わり立ち替わり「赤い家」を訪れた。バーン・ジョーンズ夫妻は秋口まで客人となった。モリスにとって生涯で最も幸せな、「完璧とっていい充実」<sup>(24)</sup>の時が、わずか五年間であったが、訪れる。「英国一の美しい」客間のある、「一篇の詩」にも譬えられる「赤い家」に仲間が会って陽気で幸福でないはずがなかった。しかも仲間たちそれぞれがモリス夫妻への贈り物とした多数の祝品が、玄関にも客間にも食堂にもアトリエにも廊下にも、家中にあったのだから。みんなで作り上げた家、という強い連帯感と高揚感があった。

「赤い家」の滞在をジョージアーナは次のように記録した。<sup>(25)</sup>

訪問は当時まだ田舎だったアビ・ウッド駅に到着することから始まった。プツラトフォームに降り立つと、甘美な香りにみちた清々しい空気が出迎えてくれた。「赤い家」から使いに出されたワゴネット型の馬車がわたしたちを出迎えてくれた。それから丘を一気に駆け上がり、高台の曲がりくねる道を三マイル馬車に揺られて、……ようやく友人の家の門の所で馬車が止まるのだった。わたしはモリスがロンドンからわたしたちをずっとここまで連れて来てくれたような錯覚を起こしそうになった。玄関口に背の高い若い女性が一人だけ

立っている姿が目に入ったからだった。

そして、仲間と共有した時間にはこんな一時もあった。<sup>(26)</sup>

ある時、取っ組み合いの最中に、大型セトルの「吟遊楽人の席」に上がって騒いでいるうち、勢いあまってフォークナーが手摺りを越えてドスンと物凄い音を立てて転ろげ落ちたことがあった。また別に、風で落ちた林檎を「楽人の席」に溜め込んで、侵入者に向かって誰彼となく投げつけ防戦を繰り返しているうちに、とうとうこの林檎がもの見事にモリスに当たって、目のまわりに黒い痣ができてしまった。

ジョージアーナがジェインと過ごした幸福な記録も残る。<sup>(27)</sup>

わたしたち、ジェニーとわたしはなんと幸せだったでしょう、午前中は刺繍や木彫りに精を出し、午後になるとケント州の地図を頼りに周辺の田園を馬車で動き回りました。クレイ低地に行ったり、また別にチズルハーストに行ったりしました。どこへ行ってもなにか新鮮な楽しみが発見できて、二人の冒険を仕事のために留守番をした殿方に語り聞かせました。時には、滅多にないことでしたが、男性もわたしたちと同行することがありました。

あるいは、

ある朝、ジェニーとわたし縫い物をしている時、見ると彼女の籠の中になにやら見慣れぬ服があるではありませんか。可愛いらしい小さな服です―男児か女兒の小さな肌着です。友人の顔を見ると、針の手を動かしながら、彼女が幸せなのが分かりました。……この後もモリス夫妻を何回か訪ねたことがありますが、当たり前ですが、この時にすぐる訪問はありませんでした。

こうした「赤い家」の歳月を、次女メイ・モリスはまだ生まれて間もない頃であるはずなのに、「なにか不思議なことですが、赤子の心に鮮明に刷り込まれた夢のような場面がいまも心に残っています」。「そうした場面が白紙状態のちっぽけな脳に刻印され、子供時代を経て、その重要な意味合いが把握できる年頃まで、ずっと色褪せなかったのは不思議といえど不思議です。その場の美しさが心を突き刺したのです。その一瞬間、それは現実とし、夢と記憶、現在と過去の一切が不思議に混り合い、最後には夢見る本人が『赤い家』の客人となって、その場のさんざめきを共有している気分になるのです」<sup>(28)</sup>

一八六一年一月一七日、モリス夫妻に長女が生まれる。母親とモリスの一番下の妹に因んでジェイン・アリス（「ジェニー」と命名された。翌一八日、モリスはフォード・マドックス・ブラウン宛に「素っ気ないメモ」を送った。「子供が生まれるというので、親切にも奥様は貴兄を迎えにくることになっている月曜日まで居てくれるということですよ。アビー・ウッドでバスに接続する夕方のロンドン・ブリッジ駅発の汽車の時刻を列挙します、午後二時二〇分、四時二〇分、六時、七時一五分です。母と子（女兒）ともにすこぶる元気です」<sup>(29)</sup>。

当時、出産には危険がつきまといつた。母親が感染症に罹って命を落とすなど、現代から考えれば、信じられないくらい母子の死亡率は高かった。妊娠中のジェインが「赤い家」への引越と年子の出産にもよく耐えたのは健

全・健康な身体の賜物だった。初産という緊張と不安にもかかわらず、妊娠中ずつと体調がよく、新居での社交を楽しむだけでなく、刺繍や絵を描いたりして積極的に室内装飾の手伝いをした。家には使用人兼乳母がいたが、ジェニーは母乳で育てられた。人工ミルクはまだなかったし、乳母による授乳は安全性についてさまざまな風評がないわけではなく、それを嫌ったからだった。

ジェニーの洗礼式は生憎風の吹く雨降りの日だった。にもかかわらず、ロセッティ、マドックス・ブラウン、スウィンバーンをふくむ大勢の友人がベックスリー教会に集まってジェニーを祝福した。翌年六二年の三月二五日には次女メアリー（メイ）が生まれた。そして翌四月には商会の設立があった。「赤い家」の完成と長いとはいえない「赤い家」の日々は、その後のモリスが労働の本質について思索を深化させ、発言を重ねることの土壌となり、商会設立へと飛躍するバネともなった得難い田園の日々であった。

◆ケルムスコット領主館 ― 太古の安らぎを秘めたまたとない隠れ家 ―

テムズ川の源流に近いオックスフォードシャのケルムスコット村にのこる一六世紀の領主館―モリスがこよなく愛したコッツウォルド地方の田園の住まいである。

「妻と子供達のために一軒、家を探しているところですよ。今度はどこに目をつけていると思いますか？ケルムスコットです、ラドコット橋の上流二マイルばかりの小村ですが、地上の天国。……エリザベス朝の石造りの古い家、それに庭がなんともすばらしい！土曜日にもう一度、妻とロセッティといっしょに行ってみるつもりです。なぜロセッティかというと、事情が許せば一緒に住みたいと彼が考えているからです」とモリスははじめてケルムスコット領主館の話<sup>1)</sup>を友人のC・フォークナーにした。

同じ頃のモリスのもう一通の手紙は、ケルムスコット村の新居をこんな風に紹介した。<sup>(2)</sup>

奥まった田舎に小さな家を借りました。妻と子供達が毎年数カ月過ごすはずですが、すでに実行済みですが。美しい不思議なほどに銜いのない建物で、外観はエリザベス朝ですが、そんなに昔のものではありません。この人里離れた辺鄙な土地に前世紀の始めか半ば頃までにゴシック風に建てられたものでしょう。オックスフォードシヤの最南西部で、すぐ近くを誕生したばかりのテムズ川が流れる、ケルムスコットという名の、ものすごく美しい灰色をした僻村です。

受取人はチャールズ・エリオット・ノートン（一八二七—一九〇八）である。ノートンはハーバードの美術史教授、ダンテ研究者、ラスキン、ロセツテイの旧友でもある。公私の別を意識した文面である。フォークナーが受信者だった、いわば仲間内の文言とは違って、私的な筆は控えられている。新居の土地柄を讚えることに終始している。ロセツテイには触れていない。それもそのはず、この書簡は、すぐ後で触れるように、転居して一か月もたないうちに、モリスが三人の知人と試みたアイスランド旅行のいわば報告として書かれた長文の手紙であり、その末尾に遠慮がちに添えられた新居紹介だったからである。

この頃のモリスは、「ロセツテイ問題」とでもいうべき難題を抱えていた。私事中の私事といえただろう。それは画家とモデルの「親密な関係」と言ってしまうえば身も蓋もないが、ロセツテイとジェインの二人にはすでに一八六八年五月頃から一年間ほど南英スカランズで同棲同然の「実績」(?)があった。直接の発端は、双方が健康を害し、それぞれに転地療養が求められていた事情があった。画家は極度の神経衰弱に悩み、モデルは執拗に続

く仕事に耐え切れず虚脱感に襲われた。モリスは妻を連れてドイツの温泉地に滞在した。ロセッティはスコットランドに知人を頼って静養に努めた。だが、二人の書簡の往復が明かすように、亭主と知人の誠意も善意も報われなかった。(この間の事情の解明にはまた別の一章に譲らなければならない)。

モリスが新居探しを思い立った背後には、その全部にはないけれど、二人の「実績」が関係したと思われる。「親密な関係」に区切りをつけようとしたのではないかと推測される。だが、モリスは、先刻のフォークナー宛手紙で、妻ジェインと画家ロセッティの相変わらずの共同生活の継続となりかねない事態を黙認するに等しい文言を綴った。それも、モリスが探し当てた理想郷での継続、多分、兩人の健康問題が絡んだのつぴきならない状況の、つまりスカランズの状態の延長線上にあるやむを得ない成り行きだったのかもしれない。

それにしても、モリスの決断ひとつで、それまでの状況に終止符を打つことができたはずである。とはいっても、ロセッティが「またとない隠れ家」と絶賛して、共同賃借までも望んでいる状況では、端が言うほど簡単なことではないだろうが。ともかくモリスは転居の意味も絶好の機会も自ら放棄したのだった。スカランズでは、ロセッティもジェインも、形式上だろうが、それぞれが「正式に」招待を受けてのことだった。そして、別荘内の別棟に滞在したのだった。

だが、ケルムスコットでは事情が全く異なる。たとえモリスの二人の娘、ジェイン・アリス(ジェニー)とメアリー(メイ)が一緒だったとはいえ、テムズ川岸の人里離れた領主館での、いわば文字どおり同じ屋根の下での暮らしである。それを承知の上で、商会の仕事のためとはいいながら、モリスは「地上楽園」であるケルムスコットを留守にして、相変わらずスカランズの時と同じように、むさ苦しいロンドンに居残った。(ケルムスコット領主館をもってモリスの夏の別荘とする牧歌的楽園論は真実の半面を伝えるに過ぎない)。



モリスはロセッティの希望に沿って、領主館の共同賃借の契約を結んだ。その頃、ロセッティは、ジェインというモデルに向かい合っていたという、単純だが、その実ものすごく錯綜した欲求に憑りつかれていた。神経衰弱が高じてノイローゼ気味でもあった。すでに画家には晩年の暗い影がつきまとい始めていた。そのことは、モリスにもよく分かっていた。分かっていたら、彼の要望を無視することができなかったのだろう。ロセッティとの付き合いを壊したくない気持もあっただろう。もつと言えば、かりに結婚生活に禍根を残すようなことになってもである。後々のモリスの言動をみると、そう考えざるをえない。

モリスのこの不可解な立場は、ロセッティとジェインの関係が消滅するまで、つまり一八七五年頃まで、時と場合によって揺れを見せはするが、基本的には変わらなかった。モリスは知っていたと思う。だが、知ることを拒んだのだろう、確かなことは分からないが。ただ確かなのは、モリスが妻とは関心を共有できない、自分はどうやら独りぼっちだ、と考え始めたらしいことである。友人にそんな心中を打ち明けてさえない。A. ショイ宛に書き送った自伝的覚書の締めくくりに、「最後になってしまいました。結婚は一八五九年、二人の娘にめぐまれましたが、人生の目的などもろもろについてとても共感し合える娘たちでした」と書いた。では妻とは？ 訊くも愚か、と言うべきだろう。

引っ越してから一か月もたたないうちに、モリスは三人の知人とともにアイスランドに旅立った。それにしても、この時期にアイスランド旅行とは、これまた一瞬どきりとさせられる「モリスの事実」である。計画はケルムスコットの状況に直面して急拵えされた逃避の旅としてしばしば受け取られるが、じつはすでに一八六八年春頃から始められた周到な準備の末の旅だった。旅立ちが七一年夏だったのは、確かにケルムスコットの事情と無関係ではないだろう。が、第一義的にはモリス独自の内発的旅だった。モリスは一八七一年の春、「隠れ家」探しと同時に、

未知の北国の旅行計画に余念がなかったのである。

ケルムスコット領主館はオックスフォードからテムズ川を上流へ三〇マイル、あるいは当時の最寄りの鉄道駅リッチレード（オックスフォードからの支線だが、現在は廃線）から三マイル、領主館はコッツウォルド丘陵の南部西田園地帯にある。ケルムスコット村周辺の流域には柳の木が目立つ。それに榆やサンザシやポプラがまじる。兩岸にひろがる冠水牧草地は春先から晩秋にかけてキンポウゲやシモツケ草などが思い思いの花を咲かせる。そこはまたモリス好みの「奥ゆかしい」ちつぽけな教会があるいは石橋が絵に描いたような風景をひろげる土地でもあった。

上流へ四マイルほど溯れば、イングルシャムの村。そこは支流コーンとの合流点、テムズ船遊びの起点でもある。モリスはイングルシャムの聖ジョン洗礼者教会を次のように称えた。「この建物はただの傍観者の目にも、絵のように美しく、心惹かれる教会である。ただそれだけではない。初期ゴシック建築としてほとんど比肩するものがないきわめて優れた作例で、設計上の洗練と美しさの点でこの規模の建物としては右に出るものは決してない」<sup>3)</sup> またラドコット村のテムズにかかる石橋を、『ユートピア便り』（第二八章）で「テムズにかかる最古の橋、その小さなアーチの一つを船でくぐりぬける時、…」と言及があるなど、この土地に寄せるモリスの並々ならぬ思いは枚挙にいとまがない。橋は三つのアーチをもつ一五世紀の石造り、真ん中のアーチ頂部はゆるやかに弧を描き、左右のアーチと好対照をなす、モリスならずとも心和むまことに情趣ある橋である。

モリス一家の新居はケルムスコット領主館と呼ばれるが、この地の領主の住いであつたことはなく、ただ一目ぼれしたモリスが、その佇まいに敬愛をこめて「マナー・ハウス」と呼んだに過ぎない。しかし、娘のメイも気に

# Kelmscott

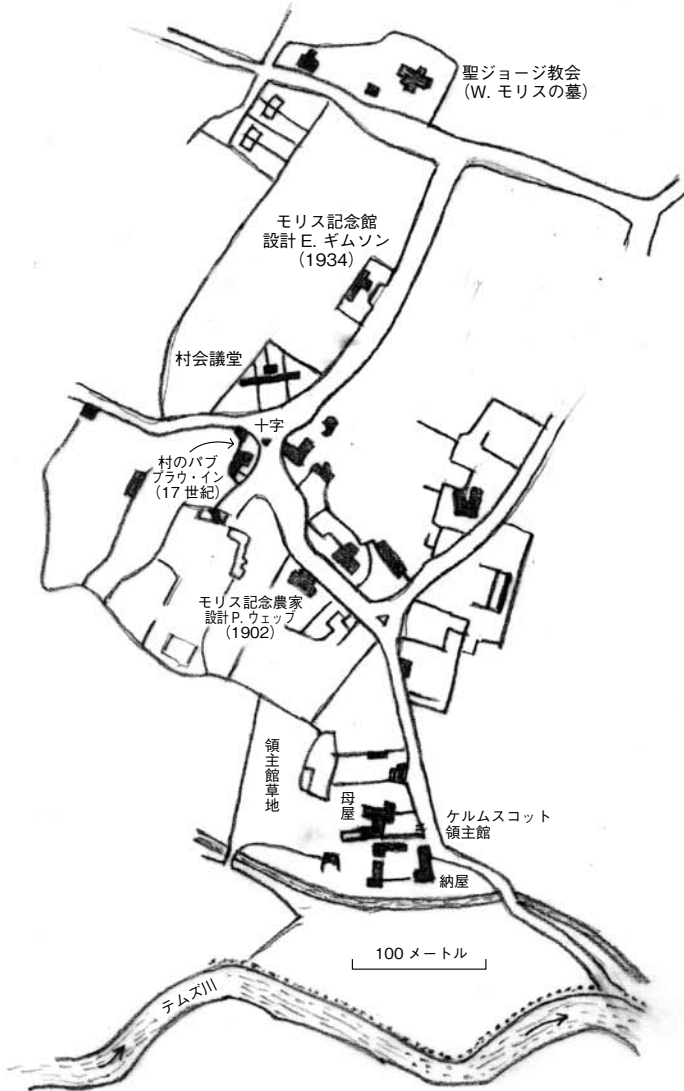


図4 ケルムスコット村

入った命名だったのでらう、ずっとこれで通したし、今や世界中の人がケルムスコット・マナー・ハウスと親しみをこめて呼ぶ。そんな領主館について、モリスは『テムズ川上流河畔の古い家をめぐるとりとめない話』と題する愛すべき小文を綴った。<sup>3)</sup>

……古い家は村道の行き止まりにあつて、その先はやがて川の戻り水が作る水たまりに行き着き、あとは川辺に広がる牧草地に通じる荷馬車道だった。……石塀に作られた木戸をくぐり抜けて、石畳の小道が前庭を通つて、近頃作り足したとはいへ無難な感じの木造の入口に通じていた。この角度から見ると、家は低い感じの三階建てで、これと直角に、大きな窓とペディメントつきの小窓が目につくもう一つの部分が接続している。家は地元産の見事な荒石積み、薄い漆喰仕上げだが、その漆喰が長年の風化によつて石と同じ色になっている。屋根はやはり地元産の美しいスレート葺きだが、最高に美しい素材で、とくにこの家をふくめたこの地方の伝統的な古い田舎家に見られるように、いわゆるスレートの大きさが「少しずつ変化して」、上部ほど小さく軒に近いほど大きく、ちょうど魚の鱗や鳥の羽根と同じ整然とした美しさがわれわれを楽しみ気分にくれる。

モリスのこの記述は、『ユートピア便り』の口絵でよく知られた、破風屋根の三階建て領主館のユニークな東正面とその前庭を描いた、C. M. ギア（一八六九—一九五七）の木版画によつてわれわれに馴染み深い。その口絵にはモリスが書物の美を求めて創出した理想の活字ゴールデン・タイプを用いて「この素描は物語の登場人物が訪れたテムズ川のほとりに立つ古い家である。以下に展開する物語はユートピア便り、あるいは憩いの一時と題され、



図5 『ユートピア便り』(1891)の木版口絵でよく知られた「領主館」の正面。一幅の絵に對面した情趣は少しも昔と変わらない。



図6 石塀をふくめた調和の心地よさはモリスが発見したユートピアの風景。

ウィリアム・モリスがこれを書いた」との文字が読める。わずかな余白に私家版印刷工房ケルムスコット・プレス（一八九一年設立）のいわばロゴマークともいえる小型な花と葉がさりげなく配されたモリスならではの巻頭のページである。

領主館は一六世紀の建築だが、口絵の右の部分が一六七〇年頃の増築部分である。石塀に囲まれた庭に立てば、一幅の絵を眼前にした趣向で、そこはすでに外界と切り離されたユートピアの領域である。コッツウォルド地方に産する石灰岩独特の優しい蜂蜜色の石造りと切妻造りが人目を引く。訪問者を正面ポーチに導く、石を敷き詰めた真つすぐな芝生の中の通路も、小さなスレート葺きの三角の屋根をのせた素朴な木造の蔦がからんだポーチも全体に調和して間然するところがない。「庭は果樹園を活かした『赤い家』とはちがって、旧来のやり方で設計された。土壌もケント州の粘土質に比較すれば砂土質だった。それでも中途半端にならず、モリスにとって、直線の小径やイチイの古い生垣に仕切られた庭



図7 領主館の裏庭にみつけた朱い実をつけたクラブアップル（中央低木）の添景。

が、独立した『部屋』の感じで理想に近かった<sup>(5)</sup>。モリス本人もその感觸を、「庭がまるで室内であるかのように思えた<sup>(6)</sup>」と表現して、「赤い家」に実現した庭と建物の一体感がここでも再現されたことを示唆した。

おそらくモリスはケルムスコットを「発見した」とき、ある種の既視感に捉らわれていたのではないか。ずっと思い描いてきた理想郷に適う風景がその時そこにあつたという手応えである。土手を隔てて榆と柳の緑の樹間に切妻の目立つ蜂蜜色の家が見え隠れする風景があつた。ケルムスコットを「イングランド南部の中でもっとも眠たげな静まり返つた田園のただ中にある村<sup>(7)</sup>」との確に言い当てたのはマッケイルだつた。「豪放なあるいは強烈な美しさはほとんどないが、代わつて比類ないこまやかさと持続する魅力がある。幼いテムズが平坦な牧草地を、周辺の低い丘陵の間を、イングランド人の集落がここに営まれてからほとんど変化を知らないかのような風景の中を蛇行する。平坦な時折テムズの氾濫で冠水する牧草地のかなかた北のコッツオールドの支脈にむかつてそれと分からぬほどの斜面が展がり、五指にあまる小さな流れがテムズに合流する。……商業活動から遠く離れ、すぐ手の届く所どころにでも理想的な建材に恵まれた土地に、美しさの伝統がどこよりも長く息づいているのは少しも不思議ではない<sup>(8)</sup>」。「豪放」や「強烈」にかわつて「こまやかさ」の心象こそが、なにごとによらず、モリスの愛する姿形である。モリスが心惹かれるのは磁器の磨きあげられた艶やかさより、陶器の素朴な温もりであり、仰々しいラテン名がついた品種改良の花より、路傍に咲く奥ゆかしい響きの古英語の気取らぬ草花である。

モリスの手紙に鳥の姿が反復される。週末を領主館で過ごしたモリスがアグレイア・コロニーオに「帰つてくる日は、かすんだ青空に遠く薄い白雲がかかつて、それは美しい朝でした。庭のいたるところを駒鳥が跳びはね囀っていました。冬鳥でノールウェイからやってきたノハラツグミが小果実のなる木のあたりでさかんに鳴いている。ムクドリは、この二カ月ずっとそうだったように、夕暮れ時に癖へ帰るまえ、大群となってひどくやかましい鳴き

声を上げる。花のない秋の庭はなんとなく侘しげだが、それでも美しいことに変わりはない」と綴った。<sup>(9)</sup> 四季の推移と庭の草花に注がれるモリスの優しい鋭い眼差しと同じ眼差しが捕らえた鳥たちの姿である。

モリスは生涯、テムズ川やその支流から遠く離れて暮らすことはなかった。随分あちこちと引越しを繰り返したというのである。出生地がすでにテムズの支流リー川が形成する浅い川谷だった。ケルムスコット領主館やマートン・アベリーの工房は言うに及ばず、蛇行するテムズや支流を意識してデザインし、命名した数々の壁紙が明示するように、モリスとテムズ川の結び付きはこのほか深い、と言わざるをえない。

一九世紀イギリス社会への手厳しい批判から出発して、モリス個人が住んでみたいと思える近未来を描く『ユートピア便り』（一八九二）は、テムズ川を主人公として読むことさえ許されるだろう。物語の後半、モリスと思われる語り手が仲間と連れ立って理想郷を求めてテムズ上流へ向かう川旅に出る。目指すのはケルムスコット。後年、下流のハマスミスに転居した時も（一八七八年一〇月）、モリスは新しい住いをケルムスコット・ハウスと名付け、しかも、そこに理想の書物をめざして設立した私家版印刷工房をケルムスコット・プレスと名付けた。『ユートピア便り』はテムズに寄せる断ちがたいモリスの想念が生んだユートピア物語である。作中ケルムスコットへ溯るテムズの川旅を、ちょうどモリス一家が領主館に暮らし始めた時と同じ夏の季節に設定して、こんな風に記述する。

川を溯っていくにつれて、その日のテムズとわたしの記憶にあるテムズとだんだん違いがなくなった。それは、株式仲買人など有産階級のロンドン風の別荘が恐るべき俗悪さでもって、木の枝が低く垂れる川辺の美しさをかつては台無しにしたのに、さすがこの辺りテムズの田園が始まる場所はいつ来きても美しかった。美し





図 8 川風に光るテムズ川辺の柳。



図 9 ケルムスコット歩道橋 一橋を渡って対岸へ、一時間ほど牧草地をいくと、バーン=ジョーンズの連作《眠り姫》を所蔵するバスコット・パークにたどりつく。

い夏の緑の間に船を滑らせていくと、青春の頃が蘇って、まるで、むかし大いに楽しんだあの船遊びを再現しているような気持ちだった。……一年の今頃はテムズ河畔全体が庭園となる。僕なら、イングリンドのどんな庭園よりも、麦畑の境界に立つ榆の木陰に寝転がって、蜜蜂のささやきや蛙から蛙へ飛び交う水鶏の啼声に囲まれていたものだ。(第二二章)

川辺の風景を描くモリスの筆にこの上ない共感と優しさがこもる。第三章「新しい人々に囲まれた古い田舎家」に、ケルムスコットの「楽園」は「新生活」を託するにふさわしい表象の場として次のように綴られる。

村道は今述べた浅い淀みのところで尽きる。道を横切ると、わたしは思わず石塀の入口の掛け金を持ち上げていた。するとわれわれは古い家に通じる石を敷いた小径に立っていた。……同行のひとりが驚きと喜びの声を発した。無理ないことだった。家と石塀の間の庭は、六月の花々の香りにみちて、薔薇は重なり合い競い合っている、最初見た時には、見る者をしてただ美しさだけ、外の一切の思いを奪ってしまう、手入れの行き届いた小庭園特有のあの甘美な豊饒を漂わせていた。つぐみはいとも高らかに歌い、鳩は屋根のてっぺんでくうくうと啼き、かなたの高い榆の木立では若葉にまじってミヤガラスが騒々しい鳴き声をあげ、アマツバメは哀れっぽい声を発しながら破風屋根のあたりを飛び交っていた。そして古い家そのものがこうした盛夏の美のすべてを見守るにふさわしい守護神であった。

『ユートピア便り』は、「宝石」にも等しい「古い田舎家」の周辺に広がる畑地で「新しい人々」の協働による乾

草刈りの遊びを歌う宴で終わる。こうした筆致にモリスが懐いたケルムスコットへの親和感を指摘したのは、『ウィリアム・モリスの庭』の著書（共著）があるペニ・ハートである。<sup>(10)</sup>ハートは、ケルムスコット領主館を破風の有無をはじめとして多くの点で「赤い家」と好対照をなす住まいと捉えた。発想は目新しいというより古い概念に沿った建物だった。煉瓦に代わって石造りの家である、ゆとりある整然とした間取りに代わって、階層を無視したような気ままな部屋の配列である。「赤い家」のように、一階の間取りの上に二階がそっくり乗った単純な造作ではない。雨水を流す異様な突起溝、屋内に代わって裏庭の片隅に設けられた三人掛けの屋外トイレ、それに領主館には電気も上水道の便もなかった。庭にしても、果樹園が庭に転用された「赤い家」と違って、なんの変哲もない従来そのままの、土壌が沖積層の庭でしかなかった。中世風の井戸のようにモリスらしさを強調した特徴はどこにも見つからない。

それでもここに住むことを願ったロセッティだったから、モリスに劣らぬ賛辞を領主館について綴った。「庭は完璧な楽園だ」、「いにしへの静穏が宿る土地、愛すべき家、そこに住むのは遠い昔これを建てた人々の子孫、その紋章がいまだに残る暖炉がある。庭と川辺に通じる牧草地は嘘偽りなく特上の趣き―まさしく完全無欠な土地。川辺の散策はこの上なく楽しい。ただし、土地の平坦が風景を単調にして、私の感興を妨げるのも事実であるが」<sup>(11)</sup>

『ユートピア便り』に描出された通りに、領主館を外界から隔てる高い石塀に出入口が設けられて、今はただ固く閉ざされたままだが、かつてはそこから中庭を通じて玄関ポーチに通じていた。玄関から通廊が客間の「鏡板の間」につながった。領主館で一番広い部屋で、高い天井と横仕切りのある大きな窓が目立つ。暖炉は一七世紀後半の造り、「夏の暑い午前中、庭の緑が反射する、この涼しい部屋で過ごしたさまざまな記憶が蘇る」<sup>(12)</sup>とモリスは綴った。この部屋と隣の小部屋には、モリス一家とロセッティの痕跡をとどめるかのように、ロセッティによる五

点のジェインの肖像がかかる。四点の素描と一点の油彩。素描の一点は、ロセッティがウエールズのスタンダフ聖堂祭壇用ステンドグラスの聖女のために二一歳のジェインをモデルにした魅惑的なスケッチであり、油彩は画家がはじめて試みたジェイン（二六歳）の肖像画《青い絹のドレスのウイリアム・モリス夫人》である。

この部屋の上が「タベストリの間」、サムソンの物語を主題にした一七世紀頃の大型タベストリが壁面全体を飾る。色褪せてしまったが、今残るインディゴ・ブルーとグレーと黄褐色が、デザイナーの意図とはまた別な効果を發揮している。南に面した窓から「テムズ川辺のクローバーに覆われた牧草地と頂上にかわいらしい楡の連なるパークシャーの丘陵が一望できるばかりか、座る場所によっては、急傾斜の美しい破風のある納屋や石造りの灰色の小屋や鳩舎が見えた」とモリスは書く。

モリスの部屋は二階にあつて、一七世紀初めのオーク材のいかにも頑丈な四柱ベッドが目を引く。ベッドを飾る刺繍の掛け布が鮮やか。娘メイの手で、モリスの詩「ケルムスコットのベッドに寄せて」（一八九一）が銘文として刺繍されている。「風が原野を走り、夜は冷えている／そしてテムズ川は牧草地と水車小屋のあいだを冷たく流れる／それでも優しくとおしいのはこの古い家／冬の過酷さのただなかにあつてもわが心は暖かい……」。ベッドカバーは野の草花をモチーフにしたいかにも優しげな刺繍、これはジェイン作。「力の限り、ジェイン・モリス、ケルムスコット」の署名入りである。壁紙は《ユリ》。本棚の傍らに、チャールズ・フェアファックス・マレイの繊細な線描で仕上げられたモリスの死に顔の素描が壁にかかる。

ジェイン・モリスの寝室は階段をあがって右、西向きの部屋である。領主館のなかで素朴な落ち着いた部屋であるのは、壁紙《柳の枝》と白い扉と目立たないほどの刺繍に飾られたやはり白いベッドカバーのせいであろうか。一九世紀初めのマホガニ製四柱ベッドを飾るのは壁紙と同柄のチンツ。一八三四年、モリスはこのベッドで生まれ

たといわれるが、なぜかそれがジェインの寝室にある。

この部屋、ジェインの寝室にはフリーリップ・ウェップがデザインし、ロセッティとエリザベス・シダルが絵つけをしたといわれるジェインの寶石箱や二点のジェインの肖像画がある。一点はC. M. ギアによる水彩、他は一八七一年四月三〇日にロセッティが描いたジェインの油彩肖像画《ミズヤナギ》である（展示品は複製）。ジェインは水辺に自生する柳の小枝を手にしている。このミズヤナギの自生する川辺の風景こそケルムスコットの象徴的風物である。テムズの流れと村の教会と領主館と岸辺に繋がれたパントが背景をなす。なんの衞いもない、自然のなかにジェインを描いた、好感がもてる佳品であるが、それはケルムスコットでしか描かれえなかつた、ケルムスコットの刻印があまりにも鮮明な一点である。

モリスが一八七一年七月アイスランドに二か月の旅に出ると、入れ替わりにロセッティがケルムスコットへやって来た。そして領主館の一番よい部屋に寝起きし、二階の「タペストリの間」をアトリエにした。こうしてジェインと二人の娘とロセッティの暮らしが始まった。それは、断続的ではあったが、三年もの間続く。モリスは留守中のジェインに不安を予感したまま、しゃにむに旅に出たのだろうか。無防備も同然で。いつものことだが、モリスの危機管理は傍目にもいかにも頼りない。アイスランド日誌の第一ページに、ケルムスコットに残してきた家族を思つて不安にかられたのか、「なにか思いがけないことが起こつて、旅に出られなくなればいいと思つたほどだ」と神経症的言葉を記した。ヘンダーソンは、「浄化作用であると同時に新世界への通過儀礼」と言い、マッケイルは「モリスの生涯でどんなに強調してもし過ぎることがない意味をもつた旅、モリスのことをよく知る人々にもなかなかその意味が理解しにくい旅」と書いた<sup>15)</sup>。

未知の北国がモリスを惹きつけたのは、記録に残る北欧の英雄譚の圧倒的な悲劇性であった。それは人間営為の頂点をきわめた世界文学の地であるというのがモリスの認識だった。政治的にも社会的にもモリスに強く訴えてくる風土の国だった。「かつて人間の姿をして、神々が棲んだ荒涼たる聖地」との思いがモリスを旅へと駆り立てた。この憧憬は、小野によれば、<sup>16)</sup>学生時代にめぐりあった一書、ベンジャミン・ソープの『北欧神話』（全三巻、一八五一）に因るといふ。「古代北欧の神話と物語の豊かさと限りない可能性を啓示した」のがこの書だったといふ。

一八六八年秋、モリスは商会の財務・実務責任者のウォリントン・テイラーの紹介でアイスランド出身の神学者・アイスランド語学者であるエイリクリ・マグヌソンを知った。翻訳書や研究書だけでは物足りなくなつたモリスは、現地に足を運ぶこと、アイスランド語を学ぶことを本気で考え始めた。エイリクリ・マグヌソンは東アイスランドの貧しい牧師の子だった。彼が後日メイ・モリスに送つた手紙でモリスとの初対面に言及して、「お父上は週三回アイスランド語を読むことにしましょうと言つて、どのサガから始めるのがいいでしょうか、と尋ねられました。……最初から正規の文法練習問題という辛気臭い作業は返上と決めていました」<sup>17)</sup>マグヌソンは案内兼通訳として旅行に同道した。

モリス一行は四名、エイリクリ・マグヌソンと盟友チャールズ・フォークナーおよび釣り・狩猟仲間の W. H. エヴァンズ（後から合流）だった。七月六日ロンドンを發つて、スコットランドのエディンバラに近いグラントン港から週二回出帆するオランダの郵便船ダイアナ号でアイスランドのレイキャヴィックに向かう。そこを起点に同国の南西部の海岸と奥地の峡谷、全三〇箇所を巡つて、再びレイキャヴィックに戻るまで「びつたり六週間、それから船で三日間、そして帰国―全部で九週間」<sup>18)</sup>の大旅行であった。旅については、モリスが克明に描き綴つた日誌

と旅の報告としてのノートン宛に書かれた手紙（先に引用した）によって知ることができる。費用も馬鹿にならないが、現在と違って大冒険の旅でもあった。

七月一三日、初めて目にした見知らぬ北の大地を海をこんな風に書き留める。「じつに恐ろしい海岸。黒ずんだ灰色の大きな山塊がピラミッドや岩棚の形をなし、まるでなかば廢墟と化した建築物のようだった。高い所は雪で綿状に被われ、渦を巻いた雲がそのまわりに棚引いており、その上に二つの峰と純白の雲に被われたぎざぎざの尾根があった」<sup>(19)</sup>。

七月一六日、アイスランドのレイキャヴィックでモリスは四通もの手紙を書いた。家族や知人に綴った旅の第一報である。妻ジェイン、母、娘たちへ、それからジョージアーナの妹ルイザ・マクドナルド・ポールドウイン宛に。いずれもはじめて見る北限の海と空に圧倒されながら、二〇頭のポニーと二人の通訳を伴う四人の旅の実見とともに、家族への思いを綴った手記である。妻宛てに「……最後の狭い海峡を抜けて、影もない深夜の薄明の中、巨大な岩山の壁を船尾に見ながら大西洋に乗り出した時の、夢にも見たことのない異様な光景はこれまでにない感動でした」。結びは「では、ジェイニ、ご機嫌よう、手紙を書く頃合いに気を付けてください。帰国の船は九月一日に当地をイギリスに向けて出帆する予定。だから八日頃には帰宅（つまりロンドンの家）できるはず。元気で、さようなら」<sup>(20)</sup>。留守宅への憂慮を隠した、強烈な郷愁に捉われたかと思われる、そんな文面である。

九月上旬、モリスが帰国しても、ロセッティは領主館に滞在を続けた。モリスはロセッティの「居座り」と受け取った。一体いつになったら、ケルムスコットは名実ともにモリスの地上楽園として復活するのか。焦燥感がモリスの判断を狂わせている。ロセッティにも同じ滞在の権利があったはずである。だが、領主館がこの二人の芸術家それぞれの理想郷として機能する道理はなかった。モリス不在の領主館、たとえ娘二人が一緒だったとしても、

ジェインとロセツティの共同生活、この不自然な関係が長続きするはずがなかった。早晩、どちらかが身を引くより仕方がなかったのだ。

モリスは仕事のためとは言いながら、ロンドンを離れなかった。いつまでも居続ける気配のロセツティに苛立ちながらも、ケルムスコットを意識して遠ざけた。遠ざけながら、不条理な「三人の寄合所帯」に無力な己を知る。この時期のモリスの手紙は二、三通を除けば、ほとんどがクウィーン・スクエアの消印である。この頃、ロセツティが友人に宛てた手紙に「モリス、帰国してもここにやって来たのは二回だけ、最初は数日間、ついせんだつては一週間の滞在だった。今はロンドン<sup>(21)</sup>」と書かれた。また、モリスの一八七二年一〇月八日付けアグレイア・コロニオ宛の手紙は、ネッド<sup>(22)</sup>（バーン・ジョーンズ）と一緒にハマスミス近辺に貸家を探しに出掛けたことを伝えた後、

この夏と秋は随分ロンドンとケルムスコットの間を行ったり来りしましたが、ゲイブリエルが居ることですし、この先もずっと居ると言っているので、僕もこれからはそう頻繁に出向くことはないでしょう。まさかゲイブリエルがそんなことをするとは思えませんが、でもここ当分は居続けるのではないかと思います。……長い手紙を書けばよいのですが、またせひそうしたいのですけれども、今日はこれまでになく気が乗らず、へまばかりやっています。現状は仕事で疲労困憊のありさですが、最悪というわけではありません。……ロンドンもこの秋は天候に恵まれましたが、どうも僕にはあまりぴったりきません——何度かめまいを感じました。今日は頭が言うことを聞いてくれないのです——心の健康についてですが、お察しがつくように、浮き沈みを経験しています。それでも、全体としては少しづつ不安も心配も遠のく感じです。同時に希望もです。でもまだ



僕には生きる力があると思っています。アテネにはがっかりだったらしいこと、お気の毒と思います。でも、現代の洗練と古代の栄光の対蹠的なこと、目も眩むばかりだろうと、僕には察しがつきます。中世の建物の遺構はほとんどあるいは全くないのでと想像しますし、初期ビザンチン時代のそれもほとんど残っていないのでしょう。歴史はアクロポリスからひとつ跳びに証券取引所ですからね。

と書くが、名状しがたい寂しさと胸苦しさが全体を覆う。それに「まさかゲイブリエルが……」と名指しなのは、モリスの書き方としては異例である。名指しで不満の種を他人に訴えるようなことはモリスらしくない。異例だったのは相手がアグレイアだったからだろうか。受取人への信頼を濃くにじませた長文の手紙であることはまちがいない。もっと長い手紙を書きたいとも言って、アグレイアとの文通がモリスの癒しになっていることをうかがわせる。

アグレイア・コロニーオ（一八三四—一九〇六）は、モリスと同年、旧姓アイオニーズ、一家はヴィクトリア朝ロンドンで財を成したギリシャ人社会の代表的一族で、アグレイアは五人弟妹の長姉である。教養があり聡明でもあった彼女は美貌をもって知られ、ラファエル前派の女パトロンの存在でもあった。マッケイルがこの二人の親交を「生涯途切れることなく、思いやりにみちていた」と書いたように<sup>23</sup>、しかし、それ以上はなにも書かなかったように、この頃アグレイアはモリスの女友達、それもまぎれもないコンフィダントであった。アグレイアに対するほど屈託なく内面を打ち明けた相手はほかにいなかった。いや、もう一人のコンフィダントであるバーン||ジョーンズ夫人を除いて。

やはりアグレイアに送ったモリスの一通<sup>24</sup>

もつと以前に前回のお手紙にご返事を書くべきでしたが、どうもこのところ、塞ぎ虫にやられて気分が優れないのです―取り立てて言うほどのこともない理由からですが、それでも当面なんとか収まってくれればいいのと思います。……先週土曜日から火曜日までケルムスコットへ行ってきました。時間の大半を川で過ごしました。テムズ川岸の日曜日はほぼ一日中、北国の容赦ない東風と土砂降りにあいましたが、こんな話でも埃っぽいアテネの貴女にはきつと清涼剤となるでしょう。……帰る日は素晴らしい天気の日で、霞んだ青空、遠く点々と浮かぶ薄い白い雲、庭のあちこちで跳びはね歌う駒鳥の姿。ノールウェイからやって来た冬鳥のハラツグミが小果実をつけた木々に一杯群がり囀っていました。ムクドリは、この二カ月間そうだったように、夕暮れ時、晝へ帰る前に大群をなしてすさまじい鳴き声をあげていました。いつもと変わらぬ美しい場所ですが、花が終わった秋の庭はどこか寂しげです。もうここへはそんなに来ることもないでしょう。

相変わらず、ロンドン西郊に家を探していますが、しかし、希望に添うのがなかなか見つかりません。

と書かれていて、変わらずケルムスコットに惹かれているであろうに、しだいにモリスは遠のこうとしている気配である。ほんの少し前までモリスのものだった、「宝石」にもたとえた「川べりの古い田舎家」に寄せた、あのアルカディアの感興はどこへ行ってしまったのだろう。また別の一通アグレイアに宛てた手紙に、ジェインがケルムスコットから戻ってきたばかりで、とても元気でいること、明日は一緒にハマスミスへ家を下見に行く予定であることに触れた後、こんなことを書く。<sup>(26)</sup>

先日、訳もなく気分が落ち込んだことを伝えましたが、その時、言わんとしたのは友人たちの私への姿勢がこ

れまでと変わったとか、誹りがあったとかいうのではなく、じつはただ小生の臆病とか男らしさを欠いたことから生じたことではなかったかと思えます。これは深追いすべきことではありません。それに、これまで度々申し上げたように、その欠けたもののために人生の喜びが損なわれてしまうという訳でもありません。人生に真の友人とならぬかの目標があることこそが大事なのであって、その点、小生はまだ運がいいと思うべきでしょう。そして機嫌のいい時、一体自分の中の何が原因であんな激情や絶望に投げ込まれるのでしょうか。訳の分からなくなることがよくあります。……、正直なところ、この秋は小生にとって陰鬱な季節でした。

モリスの「陰鬱」を表白した文面に違いないが、同時にモリスの筆はほとんど無意識に隠しているのである。隔靴搔痒の感は免れない。恐らく重要なことをアグレイアに控え目に訴えている。この点を取り上げて、ケルヴィンは「小生の臆病とか男らしさを欠いたこと」にこだわって、「ストイックな現実主義とはまた別のなにかが」<sup>26</sup>という間接的表現ながら、そこに性的な含意を嗅ぎ付け、書簡集の序「優れた分析に富む「序」である」で次のような所見を記す。「それは正直に胸のうちを語っただけでなく、われわれにジェインに対する複雑な感情を、性的不充足の告白と思われる事柄までを含めた複雑な感情を垣間見せた」文面であると指摘した。そして、この頃の手紙にはモリスの「痛々しい絶望感と敗北感が滲み出ている」<sup>27</sup>だけでなく、モリスは「もしジェイン・モリスが自分と完全に別れて、ケルムスコット領主館でロセッティの妻あるいは愛人として公然と暮らすことにしたのなら、自分は喜んで手を引こう、と言っているのと同然である」と解釈してみせた。

ハマスミスの貸家探しは、商会の盛況で手狭になったクウィーン・スクエアから、少なくとも住居部分の引越っただけでもないわけにはいかなかったのだった。そこで、一八七二年の年末にロンドン西郊ターナム・グリー

ン・ロードのホリントン・ハウスにとりあえず引つ越しするが、そこがその後六年間のモリス一家の住まいとなる。むろん、ケルムスコット領主館は手放したりはしない。しかも、引つ越したくせに、モリスは依然としてクウィーン・スクエアに書斎と寢室を確保し続けた。転居を伝えたアグレイア宛の手紙で、「これから先も二六番のここで暮らすことになるでしょう」と書く。ケルヴィンはモリスが「ジェインと穏便な相互に納得のいく形で別居を考えていたのではないか」と推察する。

上記一月二五日付けの手紙は続く。

もうひとつ、全く身勝手なことです。ロセッティがケルムスコットに居座ってしまい、まるで立ち退く気配がないのです。それで小生としてもあの避難所から遠ざかることになり（会わなくていいのに、会うなんてまったくの茶番ですから）、その上、彼がああ素晴らしい簡素な古い住まいに共感はおるか、勝手な振る舞いに終始しているので、その存在がなにかしら冒涇のように感じられます。そうは言っても、この場所を選んだ理由とこの場所が今年どれほど目的を適えてくれたかを考えれば、小生の思い込みは実に身勝手というべきでしょう。……ああ、アグレイア！ つつい狭量をさらけ出してしまいました。これ以上いい気にさせないでください。でも、いつも優しくしてくれるので、またいつかこんなことを繰り返そうです。……

手紙は「とりとめない誠<sup>②</sup>に自己本位な文面をお許しください」と結ばれている。

それにしても、重要なしかも異例な手紙である。いつもの日常の雑談を楽しむ風のアグレイアへの文面に代わって、これは自重という歯止めをかけながらも、真情の吐露に終始した、正真正銘のラブ・レターではあるまいか。

またこれ程明確に妻ジェインとロセッティの現状に関して絶望と敗北を明らかにしたことはこれまでになかった。手を焼いている苛立ちをロセッティのせいにして名指ししたのも、前例一〇月八日付手紙に次いで異例といえる。それにロセッティの滞在が「冒涇」のようだという文面は、モリスの屈辱の表白以外のなものでもない。モリスはひそかに、前年一八七一年の夏の出来事―ジェインとロセッティがケルムスコットに居て、モリスがアイスランドを旅していた―を二人の一過性の妄想に過ぎなくて、やがて感情が沈静化してくればいい、と期待していたかもしれない。

ロセッティにしても、七月の半ば領主館を離れる直前に、ジェインと手を切るつもりでいたかもしれない。しかし、そんな踏ん切りもつかずじまいだった。モリスにしてみれば、「まさかゲイブリエルがそんなことをするとは」思わなかったから、予測を裏切ったロセッティにモリスは激しく「狼狽」<sup>(30)</sup>したのである。しかし、ロセッティにも平等に滞在の権利は保証されていることをモリスは無視している。狼狽が思考を狂わせている。

一八七四年四月、モリスはとうとうこんな手紙をロセッティに書く。四月はイギリスの商慣習として地代などの賃料を支払う年四回のうちの一時期に当たる。「同封して一七ポンド一〇シリングを今期の地代としてお届けします。キンチ（おそらくケルムスコット領主館の仲介業者―編者ケルヴィンの注記）が死んでしまつて送金先が不明です。これから先のことですが、貴兄がケルムスコットの生活がたいそう気に入つておられる現状では、共同借地契約から小生は手を引くと思つてください。われわれ二人が共同所有を考えた当初を思うと、まさかの思いでしょうが、小生を卑劣なやつなどと思つてくたさい。われわれ二人が共同所有を考えた当初を思うと、まさかの思いでしょうがないのが現状です。貴兄にとつて便利で快適であれば、嬉しく存じます<sup>(31)</sup>」

俄かには信じがたい文面だが、やはり本気である。信じられないモリスの決断である。ロセッティに対する最後

通牒ではあるまいか。随分思い切ったことを書いたものである。商会の共同経営者としての絆も、ケルヴィンの指摘があるように、この成り行き次第ではジェインまでも失いかねない重大な決断である。全面的な自己放棄に等しい。こんなことはこれまでなかった。モリスの苦悩と悲慘については、折に触れてこれまでアグレイア・コロニオやジョージアーナ宛手紙を手掛かりに多少ともわれわれは認識しているつもりだったが、これほどの絶望感は想定しえなかった。先刻指摘したように、ケルヴィンもモリスの「ストイックな現実主義」だけでは理解できないとする。もしかしたら、本当にジェインが彼を完全に見限って、領主館でロセッティの妻ないしは愛人として暮らすことになったかもしれないのである。<sup>(32)</sup>しかし、そんな事にならなかったのは、ケルヴィンが言うように、ジェイン・モリスは、後年ブランドにほめかしたように、ロセッティとの関係にかならずしも十全の満足を見出していなかったからではないか。

ロセッティは、実は、この手紙（四月二六日付）を受け取る一週間前に、新しい仲介業者に共同契約更新を伝える手紙を送って、期間の七年ないしは一四年の延長を申し出ていたのである。ところが、モリスの予想外の「提案」によって更新手続きが暗礁に乗り上げてしまい、成約にいたらぬまま約三か月がたった。そして七月一六日、これも意外なことに、ケルムスコット領主館を放棄したのは、モリスでなくロセッティの方だった。モリスは「大いに安堵の胸をなでおろした」<sup>(33)</sup>はずである。ロセッティにしてみれば、単独契約もジェインとの同棲の継続も選択権を自分が握りながら、なぜか自ら放棄したのだった。

それ以後、チェイニー・ウォークのチュウダー・ハウスに引つ込んだまま、画家は二度と領主館に姿を見せなかった。放棄は唐突と見えた。が、ロセッティは三年ほど前から思ってもみない災難に見舞われていた。それはある意味、ロセッティの自業自得ともいえる災難であっただろう。人妻と同棲を始めたイタリア詩人に対するヴィク

トリア朝社会の予想されないこともないしつぺ返しだったと言えるだろう。

しかし、ロセッティ本人にしてみれば、詩人・画家として、さらにこれがもたらした健康上の甚大な影響まで含めて、まさに死活問題につながる出来事だった。ロセッティがジェインのデッサンを無数に描き、傍らでジェインがモデルを務めるまま居眠りをしている、そんな静謐な田園の夢を打ち破るだけでなく、画家にとつて深刻でありすぎる、そんな出来事だった。

世にいうロバート・ブキャナン（一八四一—一九〇一、筆名トマス・メイトランド）によって仕掛けられた「詩の肉感派」事件（一八七二）である。スコットランド、グラスゴー出身の、世間から二流評論家としか評価されていないブキャナンが、『現代評論』誌上にトマス・メイトランドの匿名で、ロセッティの詩集『生命の家』（一八七〇）に対して、三次におよぶ中傷の甚だしい個人攻撃をしかけてきたのだった。ロセッティ、スウィンバーンを官能主義者と糾弾し、前者の詩集『生命の家』は「ジェインが住む領主館と同じではないか」と槍玉に挙げ、売春宿だと侮辱した。むろんロセッティは防戦・反論につとめはしたが、受けた傷はほとんど致命傷だった。大袈裟でなく、この時の打撃から以後一〇年余、詩人・画家は最後まで立ち直ることができなかった。「たんに否定的論評というのではなく、作品と作者の道義観と動機を打ちのめす破壊的野蛮な猛攻撃であった。……ロセッティはさながら屠殺人が振りかざす斧の一撃によって斃れる牛のごとくなぐり倒されたのだった」<sup>(34)</sup>。

以後、ロセッティは強度の被害妄想にとりつかれて、多量のクロラルをウイスキーで流し込む自暴自棄に陥り、挙句の果てに、一八七二年六月八日、ロンドン人のローハンプトンのトマス・ヘイクの家で自殺を図った。<sup>(35)</sup>ロセッティはヘイク医師の手当を受け、フォード・マックス・ブラウンの家に落ち着く。モリスは事件を知ると、ブラウンに手紙を書き、「万障を繰り合わせておいでください。ジェインにゲイブリエルの容態を話してやってくだ

さい、どんなことでも結構です」と依頼した<sup>(36)</sup>。この時、ジェインはケルムスコットに居たが、急遽、上京してチェイニー・ウォークにロセッティを見舞った。

一八七四年三月、モリス・マーシャル・フォークナー商会解散という、追い打ちがロセッティを襲った。モリスが解散ないしは改組を考え始めたのは、商会に名を連ねる多くの仲間が実は商会員とは名ばかりで、もっぱら実務はモリスとウォードルが、またデザインなどの制作面はモリスとバーン・ジョーンズとウェップの三人が担っている非合理・非能率だった。解散か改組、というモリスの提案がすんなり受け入れられたわけではない。とくにブラウンが金銭上の問題にこだわった。その言い分は、要するに商会の資産は、商業権を含めて、会員全員のものであり、従って、会員はそれを対等に分け合う権利がある、というものだった。

話し合いが一〇月二三日と十一月四日の二回行われた。出席者はモリス、バーン・ジョーンズ、P. P. マーシャル、チャールズ・フォークナー、フリップ・ウェップで、ブラウンは欠席した。彼に同調したロセッティだったが、集会には姿を見せなかった。二回ともフォークナーが進行役を務めた。

モリスは二回分の議事録<sup>(37)</sup>の写本をロセッティに送る。そこには、議決事項として、資産の査定は一八七四年ミカエル祭現在(九月二〇日)とすること、その目的のために三人の部外者に委託すること、その後できるだけ速やかに総会をもつこと、などが決った。議事録の写本を同封した手紙で、「問題決着のための、この平和的な解決法は貴兄からも支持がえられることを信じて疑いません。まさに行き詰まり打開のための唯一の道です。お手数でも正式に同意書を作成していただきたいと思えます」と依頼した<sup>(38)</sup>。ロセッティから同意書がモリスに届く。ロセッティとしても商会からの仕事<sup>(39)</sup>が欲しかったし、完全にモリスと縁が切れることを回避したかったのだ。

モリスは補償金を支払わなければならなかった。バーン・ジョーンズ、フォークナー、ウェップの三人は請求権



を放棄した。モリスはロセッティとブラウンとマーシャルの三人にそれぞれ一〇〇〇ポンドを支払って権利喪失の補償とした。後々禍根を残す程の深刻な亀裂が避けられたのは、モリスの誠実さとこの緊急時に際して立派に機能した当事者間の賢明な現実主義の賜物だったろう。その証拠に、後年ブラウンはモリスとバーン・ジョーンズに宛て昔の友情を取り戻したいと手紙を書いたくらいである。ロセッティとモリスの付き合いにしても、ダウティやマッケイルが言うように、これで完全に袂を分かつたわけではなかった。細々ながらふたりの文通は続いたし、七七年の「古建築物保護協会」の設立に際しては、モリスの要望に応えてロセッティは賛同者の一人として名を連ねたほどである。

一八七四年の夏、ジェインが家族とベルギーへ旅行に出掛けると、取り残されたロセッティは症状を悪化させた。ロセッティがひとり寂しく牧草地を散歩する姿や、アトリエの暖炉の前にいる孤独な姿をメイ・モリスが記憶に留めたのもこの頃のことだろう。<sup>39</sup>あるいはテムズの川岸をヘイク医師と散歩中のロセッティが、三、四人の釣人に出会い、何をどう勘違いしたのか、突然、悪口雑言を浴びせられたと言って激怒し、尋常ならざる発作に襲われたことがあったともいわれる。もしかすると、こうしたことの積み重ねがロセッティに借地権放棄を決心させたのかもしれない。被害妄想をさらけ出したロセッティはケルムスコットにいたたまれず、ロンドンに出走することにもなったのである。すべては七月半ばのことだった。この時点で、つまりモリス夫妻がベルギーへ旅立った前後に、「三人の寄合所帯」は事実上幕を閉じたといえよう。

翌一八七五年一二月、ジェインは一家でクリスマススを過ごすため、ロセッティとの滞在先であるサセックスの海辺保養地ボゴノー（現ボゴノー・リッジス）から、単身クウィーン・スクエアに引き揚げてきた。二人の「関係」は完全に終った。その後もジェインはロセッティのモデルを続けたし、二人だけの会食を楽しんだけれども、それ

はどうみても「事件」の終末を告げる短いエピローグにすぎなかった。

なぜジェインは一八七五年の暮れ、ロセッテイとの関係に終止符を打つ行動に出たのだろう。事情はさまざまに絡み合うが、なんといつてもロセッテイの混迷を深める心身両面の健康状態だったろう。七一年ロバート・ブキヤナンの「破壊的な野蛮な猛攻撃」にさらされたことに端を発した被害妄想が高じて、ケルムスコット村でロセッテイがさらけ出した二連の混濁の事実、ジェインがその場に居合わせたわけではないが、彼女は恐怖の思いで受け止めたに違いない。ロセッテイの死後、ジェインは「あの人は狂人だった」と言ったそうだが、<sup>(4)</sup>そんな判断をしたのはこの時のことだったかもしれない。ジェインをふくめて知人・友人は一八七二年の疾患の現実を知っているだけに、誇大妄想、不眠症の再発などに伴うクロラールへの依存をなによりも恐れたのだった。

マッケイルは「これ以上モリスの姿をチェイニー・ウォーク一六番のロセッテイの家に見かけることはなかった。二つの強烈な自己中心的個性の乖離は決定的だった」という。<sup>(5)</sup>またダウティは、ケルムスコットの歳月は、内向的ロセッテイにそれまでになく外界への意識を覚醒させ、田園の風物の一切が新しい力と歓びの確かな源泉になろうとしていたのに、「ロセッテイは、このような大地と人間的交流の光輝く感化力から逃れて、物音ひとつしないう陰気なチェイニー・ウォークの家に戻りして、ふたたび暗い内なる神々にわが身を明け渡したのだった。……この変化とともに、ロセッテイの生涯はもつとも真実の意味で終った」と断じた。<sup>(6)</sup>

モリス一家はその後一八七八年十月ロンドン西郊ハマスミスに新居を求め、このテムズ川べりの住まいをケルムスコット・ハウスと呼んで、終の栖とした。新居は川に面して立つことだけが取柄の、「赤い家」や「ケルムスコット領主館」のような個性はなく、モリスらしさの情趣とも無縁な住まいであったが、モリスの社会主義活動の本拠となったことよって、前二者とはまたちがった意味でモリスの棲家であった。

【主要文献と注】

主要文献については以下の略記を用いた。

- ・ AV → Aymer Vallance, *William Morris: his art, his writings and his public life*. (G. Bell & Sons), 1893.
  - ・ FM → Fiona MacCarthy, *William Morris*. Knopf, 1995.
  - ・ GBJ → Georgiana Burne-Jones. (G.B.J.), *Memorials of Edward Burne-Jones*. 2 vols. Macmillan, 1909.
  - ・ J1 → Jack Lindsay, *William Morris*. Constable, 1975.
  - ・ JM → J.W. Mackail, *The Life of William Morris*. 2 vols. Longmans Green and Co, 1912.
  - ・ LD → Linda Parry (ed.), *William Morris*. Harry N. Abrams, 1996.
  - ・ M1 → May Morris (ed.), *The Collected Works of William Morris*. 24 vols. Longmans Green, 1914.
  - ・ MS → May Morris (ed.), *William Morris—Artist Writer Socialist*. 3 vols. Russell & Russell, 1966.
  - ・ NK → Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*. Princeton University Press, vol.1, 1848–1880, (1984); vol.2, 1881–1888, (1987); vol.3, 1889–1892, (1996); vol.4, 1893–1896, (1996).
  - ・ PH → Philip Henderson, *William Morris—His Life, Work, and Friends*. MacGraw-Hill, 1967.
- ◆ 「赤い家」
- (1) JWM, vol.1, p.143.
  - (2) FM, p.155.
  - (3) Esther Meynell, *Portrait of William Morris*. (Chapman & Hall, 1947), p.59.
  - (4) William Gaunt, *The Pre-Raphaelite Tragedy*. (Sphere Books Ltd, 1988), p.126.
  - (5) 『富本憲吉著作集』(五月書房、昭和五六年)、『四三—四四六頁。初出誌『美術新報』。(第十一卷、四・五号、明治四四年二月)』
  - (6) JL, p.108.
  - (7) AV, p.49.
  - (8) 同右書、p.44.
  - (9) JL, p.108.
  - (10) FM, pp.155-156.

- (11) GB-J, vol.1, p.208.
- (12) 一般公開後、一度ならず現地に足を運んだが、その都度、ジョージアーナがいみじくも指摘した「家中たつぷりした余裕がある」モリスの生活空間が次第に希薄になるばかりだという印象が強かった。二〇一三年、『ガーディアン』紙（八月一日）が「赤い家」で壁画が発見された、と報じた。同紙によれば、モリスの寝室の備え付け大型衣装箱の背後に隠されていた一〇〇年前の壁紙を修復中に新たに壁面大の人物群像画が出現したという。人物の典拠は不明ながら、チョーサー、アーサー王伝説、あるいは聖書であろうと推察した。
- (13) PH, p.60.
- (14) GB-J, vol.1, p.210.
- (15) LP, p.95.
- (16) JWM, vol.1, p.147.
- (17) FM, p.165.
- (18) GB-J, vol.1, p.212.
- (19) FM, p.155.
- (20) Esther Meynell, 前掲書, p.58.
- (21) JWM, vol.1, p.148.
- (22) William E. Fredeman (ed.), *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*, (D.S. Brewer, 2002), Vol. II, p.441.
- (23) MM-2, vol. p.71, ed.
- (24) PH, p.166.
- (25) GB-J, vol.1, p.208.
- (26) 同右書, p.210.
- (27) 同右書, p.213.
- (28) MM-1, vol.1, pp.xiv-xv.
- (29) PH, p.65.
- (30) NK, vol.1, 書簡二二。(フォード・マドックス・ブラウン宛モリスの一八六二年一月一八日付)

◆ケルトスロット領主館

- (1) NK, 書簡一三四。(C.G.フォークナー宛モリスの一八七一年五月一〇日付)
- (2) 同右書, 書簡一五四。(C.E.ノートン宛モリスの一八七一年一〇月一九日付)
- (3) MM-2, vol.2, p.160.
- (4) 同右書, pp.364-371. 初出は『ザ・クウェスト』。(一八九四年一月)
- (5) Jill Duchess of Hamilton, Penny Hart, John Simmons, *The Gardens of William Morris*, (Frances Lincoln, 1998), p.54.
- (6) MM-2, 前掲書, p.367.
- (7) JWM, vol.1, p.239.
- (8) 同右書, pp.240-241.
- (9) NK, 書簡一七三。(マクレイア・コロニーオ宛モリスの一八七二年一〇月二四日付)
- (10) Jill Duchess of Hamilton, Penny Hart, John Simmons, 前掲書, p.51.
- (11) William E. Fredeman, ロセッティ書簡集, 第五巻, 書簡七一―九九。(フランシス・ラヴィニア・ロセッティ宛ロセッティの一八七一年七月一七日付)
- (12) MM-2, 前掲書, p.368.
- (13) 同右書, p.369.
- (14) PH, p.119.
- (15) JWM, vol.1, p.247.
- (16) 小野二郎, 前掲書, p.304.
- (17) MM-1, vol.7, p.xvii.
- (18) NK, 書簡一五四。(チャールズ・エリオット・ノートン宛モリスの一八七一年一〇月一九日付)
- (19) MM-1, vol.8, p.19.
- (20) NK, 書簡一四四。(シェイン・モリス宛モリスの一八七一年七月一六日付)
- (21) William E. Fredeman, 前掲書, 書簡七一―一五九。(ベル・スコット宛ロセッティの一八七一年一〇月二日付)
- (22) NK, 書簡一七一。(マクレイア・コロニーオ宛モリスの一八七二年一〇月八日付)
- (23) JWM, vol.1, p.298.

- (24) NK, 書簡一七三。(アグレイア・コロニーオ宛モリスの一八七二年一〇月二四日付)
- (25) 同右書, 書簡一八〇。(アグレイア・コロニーオ宛モリスの一八七二年一月二五日付)
- (26) 同右書, p.173. 注(25) 書簡一八〇に付された注記による。
- (27) 同右書, p.xxxviii.
- (28) 同右書, 書簡一八三。(アグレイア・コロニーオ宛モリスの一八七三年一月二三日付)
- (29) 同右書, p.xliii.
- (30) 同右書, 書簡一八〇。
- (31) 同右書, 書簡二三三。(ロセッティ宛モリスの一八七四年四月一六日付)
- (32) 同右書, p.xxxviii.
- (33) JWM, vol.1, p.317.
- (34) William Gaunt, *The Pre-Raphaelite Trygedy*, (Sphere Books Ltd, 1975), p.117.
- (35) William E. Fredeman, 前掲書, p.219, p.221. NK に拠れば六月二日と注記された。フォード・マドックス・ブラウン宛モリスの一八七二年六月(日付なし)の書簡一六四参照。
- (36) NK, 書簡一六四。(フォード・マヂックス・ブラウン宛モリスの一八七二年六月の書簡。日付不詳)
- (37) 会議録の全文はNK, vol.1, pp.236-7.
- (38) NK, 書簡二五二。(D.G.ロセッティ宛モリスの一八七四年一〇月「二四日」付)
- (39) MM1, vol.8, p.xxvi.
- (40) O. Doughty, *Dante Gabriel Rossetti - A Victorian Romantic*, (Yale University Press, 1949), p.567.
- (41) JWM, vol.1, p.317.
- (42) O. Doughty, 前掲書, p.568.

【図版出典】

- ・ 図1 「赤い家」平面図—ウィリアム・モリス展図録(一九九七) 所載の図面(㉑)を簡略・補筆した。
- ・ 図4 「ケルムスコット村地図」—同村の案内揭示板を下敷に簡略・補筆した。
- ・ 図2, 3, 5〜9 —写真七点は筆者の撮影。